

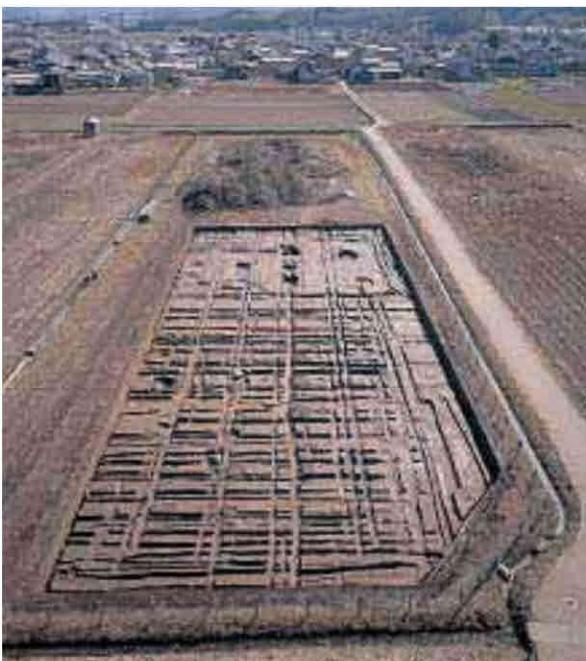
発掘調査の概要

藤原宮朝堂院東門と東第二堂（飛鳥藤原第 125 次）

藤原宮朝堂院は、内裏・大極殿と並んで、宮の重要な空間であり、現在でいえば国会議事堂に相当する施設です。朝堂院には東西対称に 12 の瓦葺き礎石建物が整然と並んでいました。その外側には南北 318m、東西 235 m の回廊が取り囲み、南と北には門が開いていました。一方、発掘調査や文献史料の研究成果から、後の平城宮、長岡宮、平安宮では、東西南北の四面すべてに門が存在したことがわかっています。しかし藤原宮では、東西の回廊での門の存在は今まで未確認でした。そこで飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、その確認を目的に、1 月 7 日から 4 月 14 日にかけて、発掘調査を実施しました。

調査の結果、東の回廊の中央付近で、大型の礎石、その据え付け穴、そして屋根から落ちる雨水を受ける雨落溝など、門の存在を裏付ける証拠を見つけました。門の南側 1/3 程度は、調査区の外でしたが、過去の調査結果なども併せて考えると、桁行 3 間、梁行 2 間、柱の間隔は 5.1 m の八脚門に復元できます。また今回の調査では、昨年春にその北端を確認していた朝堂院東第二堂の調査も併せておこないました。その結果、建物の南端部分が確認され、その建物規模が桁行 15 間（南北 62 m）、梁行 5 間（東西 15 m）であることが確定しました。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 渡辺丈彦）



手前が東第二堂・奥が東門（西から）